

私が晃司さんの秘書になって、もうすぐ二年になる。役員会議の補佐として同席し、議事録をとる。それが私の仕事だ。

晃司さん——晃司社長は、社内では「気さくで仕事ができる社長」として知られている。叩き上げで社長まで上り詰めた人で、誰に対しても感じよく接する。三十七歳。整った顔立ちで、清潔感はあるけれど隙がないわけでもない。夕方になると少し崩れてくる髪が、むしろ似合っている。低い声。よく笑う。

私を含む社員たちは、みんな晃司さんのことを信頼している。

ただし——「誰にも気づかれない状況」に限って、別の顔が出ることを、私だけは知っている。

知っていても、どうにもできないまま、今日も隣に座っている。

* * * * *

会議が始まったのは午後二時ちょうどだった。

楕円形の長机に役員が七人並び、晃司さんが上座に、私は晃司さんの右隣に座る。手元にはノートパソコン。議事録用のファイルを開いて、カーソルを点滅させたまま待機する。いつも通りの光景。そう見えるはずだった。

「では第一議題からやろうか。今月の業績報告から、田村部長くん」

晃司さんの低い声が会議室に落ちる。役員たちが一斉に手元の資料を開く。

そのとき、長机の下で、晃司さんの手が動いた。

さりげなく、自然に。膝の上に乗せていたはずの手が、横にずれてくる。テーブルクロス陰に隠れながら、私のスカートの裾をそっとすくい上げるようにして、指先が太ももの内側にふれた。

「——っ♡」

（嘘……っ、また、また始めるつもり……っ！？）

心臓が一拍飛んだ。息を詰めたまま、顔だけは田村部長の方を向く。手はキーボードの上に。指は動かない。

「先月末時点での数字ですが、前年比で——」

田村部長の声が続く中で、晃司さんの指がじわじわと内側に滑り込んできてくる。ゆっくり、丁寧に、ふれているかふれていないかのきわどい圧力で太ももをなぞる。

むにゅり♡

柔らかい感触を確かめるみたいに、指の腹が肌を押す。

(いや……っ、こんな場所で……ッ♡)

脚を閉じようとする。でも晃司さんの手はすでに内腿の深いところにあって、閉じられない。膝を外に開こうにも、隣に人がいる。逃げ場が、ない。

「——以上が先月の概要になります」

晃司さんがゆっくり頷く。

「ありがとう、みんなどう？ 質問はある？」

会議を進めながら、指がスカートの奥へ向かってさらに進んだ。

「うッ♡」

声は飲み込んだ。唇の内側に押し込んだ。

晃司さんの指先が、下着のふちをそっと辿る。ぬるん♡と熱い感触。布地のきわをなぞって、濡れているかどうかを確かめるみたいに。

(わかってる、もうわかってるでしょ……っ♡♡
触らないでっ♡♡)

もうショーツの中の熱が、自分でもわかる。まだ手が動き始めてからほとんど経っていないのに、すでに下着の中心がじんわりと濡れはじめていた。

「議事録、ちゃんと打ってる？」

耳のすぐそばで、息と混じって囁かれる。低い声。ほとんど動かない唇のまま、役員たちにはただ前を向いているように見える。

(打てるわけないでしょ……ッ♡)

指先がするりと下着の上に乗った。

ぐちゅっ♡と小さく音がした気がして、私は目を見開いた。

「ほら、前向いて」

言われて視線を前に戻す。顔が熱い。耳が熱い。下着の中心を指の腹でゆっくり押し込まれながら、

なんとか真顔でモニターを見つめる。

指先がゆっくり滑る。くりくり♡と円を描くような動きで、クリトリスが近くをじわじわと探ってくる。

「う……んっ……♡♡」

声が漏れそうになって、慌てて咳払いをする。田村部長の隣に座る役員がちらっとこちらを見た気がして、全身が固まった。

（見てる、見てるかもしれない……ッ♡でも晃司さんの指が、止まらなくて……っ♡♡）

こり♡こり♡とクリトリスを弄る感触が伝わってくる。鋭い。布越しなのに、いや布越しだからこそ、摩擦が甘くて過剰で、脚の付け根が震えてくる。

「第二議題に入ろう。新規プロジェクトの件、鈴木部長、どうぞ」